とお客の人々が這入つて來て、食卓に着き、飲めや歌への大宴會となりました。その時王様はおそば近く羊飼の娘をお呼びになつて、

『どうぢや、こんどの妃は美しいだらう？』

とおつしやるのでした。羊飼の娘は涙を呑んで、

『はい。おつしやる通りでございます。王様の御意に召します方ならば、私が改めて申上げるまでもございません。』

と答へました。すると王様も急に涙ぐまれて、

『おお、よく言つてくれた……』

と、女の手を握り、

『よく辛抱してくれた！實は今までのことは心だめしであつた。お前の心はもうすつかりわかつた。さあ早く王妃の衣裳を着けてお出で！そしてここへ並んでお坐り。そして何時までも元の通り王妃となつてくれ。――何を隠さう。妃と云つたこの美しい姫はお前の生んだ娘だ。それからここにゐるのがお前の生んだ男の子だ！』

と、お詫びするやうに申されました。

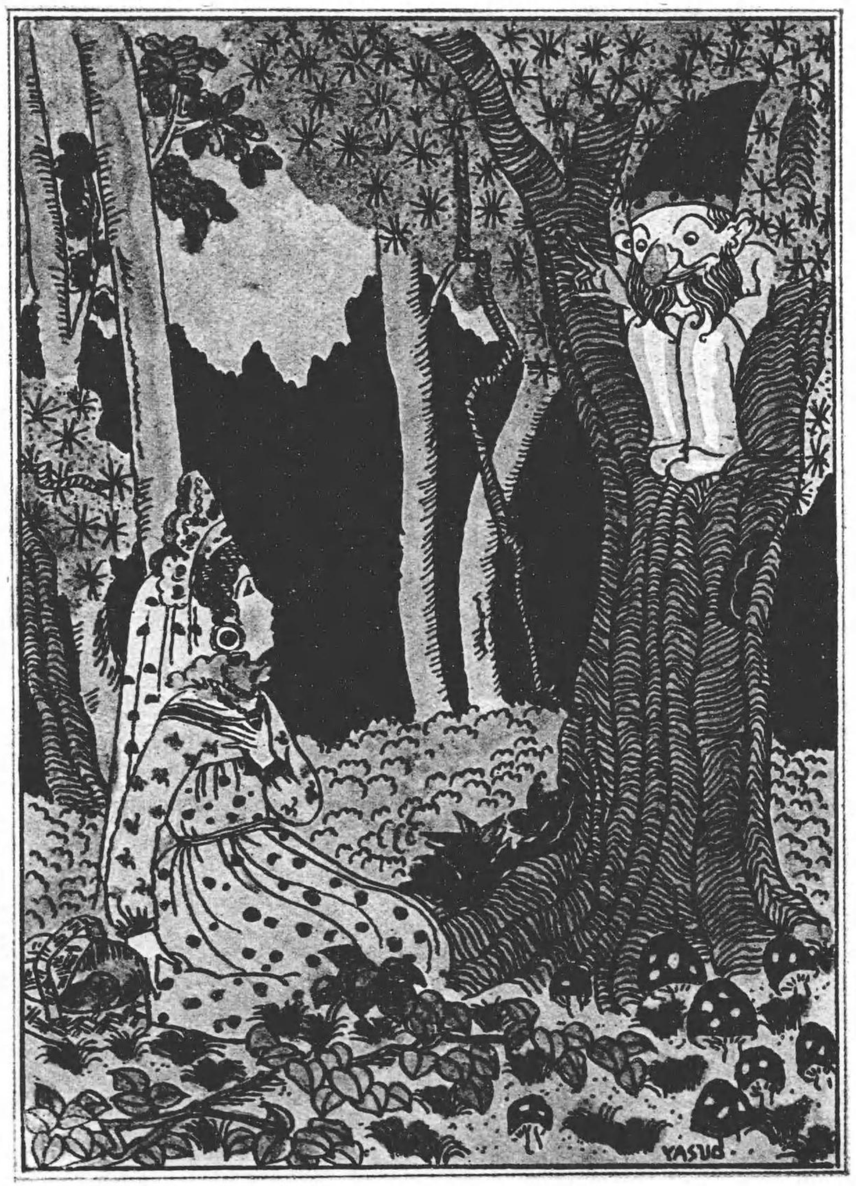
それから後は何の約束も何の奸計もなく、互に打ちとけ合つて、親子四人目出度く月日を送られました。

霜の小父さん

一

むかし或る所に爺さんと婆さんと三人の娘とが住んでゐました。そして一番年上の娘マルーシヤは、婆さんには繼娘でした。婆さんはその娘が憎らしくて、しよつちゆう責め立てたり、苦しい仕事を言ひつけたりしました。

繼娘のマルーシヤは朝も暗いうちから起きて、火を焚きつけるやら、水を汲むやら、拭掃除をするやら、家畜に餌を遣るやら、何くれとなく立働きました。



霜のお爺さん

けれど婆さんにはどうしても氣に入りませんでした。

『此の娘はまあなんだらうね。なんて無性者なんだらうね。箒でも火箸でも片附いてた事はありやしない。だから家が埃だらけだよ。』と婆さんは呶鳴りました。

それでもマルーシヤは何にも言はず、たゞ泣いてゐました。そして、どうにかして繼母と妹達の氣に入るやう、あけくれ心を碎きました。

然し妹達までその母に見習つて、何やかやとマルーシヤに辛く當り、口喧嘩をしては泣かせるやうな

こともちよい〳〵ありました。それがまた妹達には面白くて堪りませんから、態々朝寝をして、汲んである水を無駄に使つたり、綺麗な手拭を汚したりしました。そして皆が晝の御飯を食べる頃、やつと仕事に手を出すのでした。

そのうちにマルーシヤはだん〴〵だん〴〵生長して、最早いゝ年頃になりました。

一番マルーシヤを可愛がつて居たのは爺さんでした。マルーシヤがいつも親孝行で、働き者で、すなほに人の言ひつけを守り、決して人に逆らふやうな事がなかつたから、どうにかして幸福にしてやりたいと思つて居ました。

然しさう思つてくれる爺さんは氣が弱く、婆さんは邪慳だし、二人の妹は揃いも揃つてなまけ者の骨頂と來てゐますので、ほんとにマルーシヤの立つ瀬はありませんでした。

で、爺さんはどうかして二人の娘をよく仕込まふと思ひ、婆さんはどうかして年上のマルーシヤを家から出さうと考へてゐました。

『爺さん〳〵、マルーシヤももういゝ年頃だから、お嫁に遣りませうよ。』

『宜からう』。と決まつて、爺さんは寝床に這入りま

した。婆さんもつゞいて這入りしな、

『ぢや、お前さん明朝早く起きて、馬に橇を附けて、マルーシヤを連れ出しなさいよ。――それからマルーシヤや、お前は自分の持物を葛に入れて、晴衣に着換へて、爺さんとお客に行くんだよ。』と言ひました。

何にも知らないマルーシヤは、お客に行くのだと聞いて大喜び、一夜中快よく眠りました。

翌朝マルーシヤは目を醒ますと、先づ顔を洗つて、神様にお祈りして、自分の持物を葛に納め、ひとりで身づくろひをしました。さておつくりも濟んで姿を見ると、もう何處へ出ても耻かしくない立派な花

嫁でした。

爺さんは暗いうちに橇の支度をすまし、門口の所へ引いて來て、家へ入りました。

『どうだ、支度は出來たかね。馬はもう出るばかりになつてるぞ。』

『えゝ、もうすつかり出來ました。』

婆さんもいそ〳〵して、

『支度が出來たら、さあ〳〵みんなお膳について下さい。』

そこで、爺さんと娘とはお膳に向ひ、婆さんは側でお給仕をしました。御馳走はパンやお吸物などで

した。

『ではマルーシヤ、早く食べて出掛けることにしな。わたしはもうお前を見るのは厭き〳〵した……。それから爺さん、お前さんはこの娘をいゝお婿さんの所へつれて行つてお呉れ。いゝかね爺さん、最初は道を行くのだよ。それから右へ曲つて暗い林に入つたら、まつすぐに丘の上の大きな松の樹を目的に行くのだよ。さうすると霜の小父さんといふ立派な若者が居るから、その男へマルーシヤを引渡して來るのだよ。』

爺さんはびつくりして開いた口が塞がらず、食べてゐたパンも手から落して了ひました。娘はめそめそ泣き出しました。

『何もさう驚くことはない。お婿さんといふのはそれは立派な金持の方なんだよ。お金などはどれ程あるか分らない。樅でも松でも樺でもみんな銀モールで飾つてゐるよ。住居だつて羨ましいやうな建物だし、第一その男がえらい人なんだからね。』

爺さんはしほ〳〵起ち上つて、娘に上衣を着せ、連れ立つて出かけました。道程はどの位あつたか知れないけれど、とにかく二人は林まで來たから、道を轉じて深い山奥へ入つて行きました。

やがて一本松の所へ來ますと、爺さんは立止つて、娘を橇から降し、箱を置いて、その上に娘をのせました。

『ぢや娘、こゝに坐つて、お婿さんの來るのを待ちな、いゝかい、叮寧にしてあげなけりやいけないよ。』

と言つて、爺さんは馬を向けかへて、家へ歸りました。

娘は箱の上に坐つたまゝぶる〳〵慄へて居ました。泣かうとしても涙が出ませんでした。すると俄かにさら〳〵さら〳〵といふ物音がして來ました。それは霜の小父さんが樅の木の葉末に止まつて、枝から枝へ跳ね下りて來るのでした、

そのうちに霜の小父さんは娘の側へ來て、高い松の上から言葉をかけました。

『寒くはないかい、娘さん。寒くはないかい娘さん。』

『いゝえ、寒くはありません。』

霜の小父さんはもつと下へ降りて來て、ます〳〵あたりを凍らしました。

『寒くはないかい、娘さん、寒くはないかい、娘さん。』

娘はほつと一息吐いて、

『いゝえ、寒くはありません。』と言ひ張つて居りました。

霜の小父さんはもつと〳〵強く、木がパチ〳〵裂けるほど凍らしました。そしてまた、

『寒くはないかい娘さん、寒くはないかい娘さん。』

と訊きました。

娘は凍えて來ましたから、微かな聲を出して、

『もうし〳〵霜の小父さん。寒くも暑くもありません……』と言ひました。

すると霜の小父さんは、その娘がしみ〴〵可哀相になりました。で、外套を何枚も重ねて着せ、厚い蒲團のなかに入れて溫めました。

二

翌朝婆さんは爺さんに向つて、

『爺さん〳〵、山へ行つて見て來てお呉れ。』

と言ひつけました。　爺さんは早速馬を仕度して出かけました。　やがてマルーシヤの側へ近づいて見ますと、死んだと思つた娘はにこ〳〵して、綺麗な着物にくるまつて居ました。　そして箱には一ぱい色色な寶物がはいつて居りました。

爺さんは何かにと問ふ暇もなく、みんな車に積んで、娘をつれて家へ歸つて來ました。

驚くの驚くまいのつて、婆さんは繼娘のマルーシヤが生きてゐて、ちつとも變らないのを見て、おつたまげて了ひました。それればかりか、新しい外套や肩掛を着て、澤山な寶物をもつて來たので、

『やれ〳〵娘、わしも連れて行つて貰ひたいものだよ。』と羨ましさうな顏をしました。

婆さんはやがて爺さんに打向ひ、

『爺さん、ほかの娘達もあそこへ置いて來てお呉れ。そうしたらもつと〳〵寶物を貰つて來るだらうから。』といひました。

翌朝になると、婆さんは二人の娘にどつさり御馳走をして、嫁入仕度をさせ、立たしてやりました。

爺さんはマルーシヤを置いて來た所へ、二人の娘を連れて行つて、前の松の樹の下へ置いて來ました。

二人の娘は坐つてげら〳〵笑つてゐました。

『厭だよ、お母さんは、山奥でお婿さんに逢はせるなんて。ね、お前、村に若い衆がゐない譯ぢやあるまいしさ。こんな處にゐて、おばけにでも出られた日にや、逃げ所もありやしないよ。』

二人の娘は外套を着てゐましたけれど、寒くて寒くてたまりませんでした。

『パルちやん、お前はどうだい、私は肌身が刺される

やうだよ。來るのなら、もうお婿さんが來る筈だね。二人共凍え死んでしまふぢやないの……』

『おごしちやいやあよ。姉さん、もう直ぐにお婿さんが來るかも知れないわ。』

『だけどね、パルちやん、若しお婿さんが一人來たら、二人のうち誰を欲しがるだらうね？』

『そりや姉さんよ。』

『あら、お前かも知れないわ。』

二人は互ひに掛引し合つて居りました。

すると、霜の小父さんがあたりを凍らし始めて、パチ〳〵パチ〳〵枝から枝へ渡つて來ました。二人の

娘はお婿さんが來る足音だと思ひました。

『あれ來るやうだよ、パルちやん。鈴の音がするよ。』

などゝ言つて居りました。

と、霜の小父さんがだん〳〵だん〳〵近寄つて、到頭高い松の樹に止まりました。そして二人の娘に屈みかゝつて、

『寒くはないかい、娘さん。寒くはないかい娘さん。』

と訊きました。

『寒くて寒くて仕方がありませんよ。霜の小父さん、これでは凍えてしまひます。私達は待つてる人があるのですが、道でも迷つたのか、どこかへ行つて

了ひました。』と娘達は答へました。

霜の小父さんはもつと下へ降りて、もつと強く二人に迫りました。

『寒くはないかい、娘さん、寒くはないかい娘さん。』

『何だつてそんなに側へ寄つて來るのよ？　あつちへ行つてお呉れ。私達は手でも足でも千切れさうぢやありませんか……』

霜の小父さんはもつと下へ降り、もつと近寄つて二人を凍えさせました。二人の娘は到頭息が絶えてしまひました。

三

翌朝婆さんは眉毛をつりあげて言ひました。

『爺さん、早く橇を支度して、着物や寶物を取つておいで、戸外はひどい寒さだ、さぞ娘達は寒かつたらう。さ、爺さん、早く行つて來てお呉れ。』

爺さんはいそ〳〵と支度して、婆さんが朝飯のすまないうちに出掛けて行きました。

やがて松の木の下に來て見ますと、二人の娘は頭を揃へて死んでゐました。何とも致しかたがありませんから、爺さんは二人を橇に抱上げ、着物を上に

掛けて、家へ曳いて來ました。婆さんは駈け出して來て、

『娘達はどうしたの？』と橇に飛びついて、着物を引つ剝ぎました。二人の死骸を見て驚いた婆さんは

さん〳〵爺さんに喰つてかゝりました。

『飛んでもない事をしたのね爺さん、これはわしの血を分けた娘達なんだよ、またとない可愛いゝ娘達なんだよ。それをまアこんなにして、このくそ爺奴、火箸でどやしつけてやるから、さう思へ。』

『何を言ふのだ馬鹿尼、お前があまり慾張つたから、そのせゐなんだ。俺に何の罪がある、お前が遣りたがつて遣つたのぢやないか……』

婆さんは怒つたり、吸鳴つたりしましたが、やがて心をとり鎭め、自分の惡かつたことを懺悔して、それからは善行を積むやうになりました。

マルーシヤは程なくよいお婿さんを迎へて、一生樂しく暮しました。

意地悪女房

ある所に大層仲の悪い夫婦が居りました。妻はこの上もない悪いすねもので、夫の言ふことなんぞ少しも聽きません。夫が早くお起きと言へば、三日も夜晝の區別なしにグウ〳〵寢たり、お眠みと言へば、またゝきもしないで起きてゐたり、またパンを燒いて呉れと言ひつけると、

『パンなんぞこさへなくたつていゝやい、馬鹿！盜賊！』

と惡口を吐きます。そこで夫が、

『あゝそんならこさへるのはおよし。』

と言ひますと、妻はパンを大きな槽に二つも燒いて夫の口に押し込み、

『さ、食へ、この沒分曉漢奴、みんな食べろ。』

と言ふ始末です。こんな風ですから夫は毎日毎日痩せ細るばかりで、終には悲しくて悲しくて家に居るのさへくさ〳〵して、耐らないものですから、林へでもいつて、漿果でも採つてみたら、少しは心の憂も忘れられやうかと、或る日のこと家を出て林の中へ入つてゆきました。すると其處に一ところ大層美味相な木苺が鈴成に生つてゐる藪があつて、その藪

の中に幾丈と底の知れぬ深い〳〵井戸がありました。これを見ますと、夫は偶と思ひつきました。

『あゝ、俺はあの邪慳な女房と一緒に暮してゐたら、一生苦しい目をみなけりやならないだらう、どうかして一度懲しめのため、この穴の中へ陷してやることは出來まいかしら。』

と、いろ〳〵考へながら家へ歸つて來ました。そして家へ着くと、いきなり妻に向つて、

『おい、林へ漿果を採りに行つちやいけないよ。』

と云ひました。

『否え、行く、行く、行きますとも。』

『俺は木苺の藪を見つけたが、採つちやいけないよ。』

『いゝえ、とりますとも。うんとこつて、お前さんなんぞには一つだつてやりやしないから。』

それをきくと、夫は早速又林へとつて返しました。妻は直ぐ後から跟いてゆきました。さうして木苺の藪が見える所まで來ると、いきなり先へ駈けぬけて、夫に向ひ、

『來ちやいけないよ、盜賊め！來たら殺して終ふから。』

と怒鳴りながら、一足前へ出たかと思ふと、忽ちドサリと底知れぬ深い井戸の中へ陷ちこんで終ひました

た。

夫は家へ歸つて三日三晩一人で暮しました。四日目に妻はどうなつたかしらと思つて、林の井戸へ様子を見に參りました。そして持つて行つた大索を穴の中におろして、暫くしてからそろ〳〵と引上げて見ますと、繩には小さな惡魔が一匹捉まつて居りました。夫は喫驚して、急いで此の惡魔を穴の中へ投り込まうといたしました。すると惡魔は哀れつぽい聲を出して、

『もし〳〵善いお方。お願です、どうぞこの穴の中へは投り込まないで下さい。さうして世の中へ出して下さい。實は私共のところへ先頃から惡い婦が參りまして、みんなを片端から嚙みついたり、抓つたりしますので、誠に弱り切つてをります。そのかはり若し出して下されば、屹度御禮は致しますから。』と言はれて男は不憐に思つて、此の惡魔を自由の世の中へ出してやりました。するとその惡魔が、

『さあお百姓さん、私と一緒にウオログダ町へお出で下さい。あそこで私が人間に病氣をさせますから、あなたはそれを治しておやりなさい。』

と申しますので、男は『よしきた』と言つて、一緒に出かけました。 軈てその町へ來ると、惡魔は金のあ

りさうな商人の妻や娘などのところへ行つて、その軀の中へ入りこみます。すると妻や娘は直ぐに工合が悪くなつて病氣になります。そこへ例の百姓が私は醫者ですと云つて出かけて行くのです。呼ばれる所へは何處へでも行つてやりました。で、百姓がその家の玄關に來ると、惡魔は早速退去して病人は直ぐに全快し、今までの悲しみが急に喜びに變るといふのでした。ですから百姓はお金は貰ふ、美しい御菓子は御馳走になるといふ風で、まるで福の神にでもとつつかれたやうな有樣でした。かうやつて軈て幾日か經つてから、ある日惡魔は百姓に向つて、

『お百姓さん、お前さんはもう充分でせうね。それで今度私はある金持の家へ行きます。けれどお前さんはそれを治してやつてはいけませんよ。若し出かけたりしましたら、喰ひ殺して終ひますから、そのつもりで。』

と言ひました。すると案の條、ある金持のところの娘が病氣になりました。大變に惡くて、とても駄目だと思はれる位でした。召使共は直樣例の百姓を迎へにとんで行きました。そして無理やりに引擔いで、主人の邸へ連れて來て、それから、

『さあ、何卒治して下さい、若し治して呉れなけりや、氣の毒だが、首を頂戴するから其積りで。』

と言つて嚇かしつけました。あゝ何うしたらいいだらう……と百姓は困つて了ひましたが、ふとうまい考へがつきました。先づ馭者でも厩の掃除番でも下男でも下女でもかまはないから、なるだけ大勢で主人の家のまはりを驅けまはつて、長い鞭を鳴らしながら、出來るだけ大きな聲で、

『邪い女房が來た。邪い女房が來た。』

と叫ぶやうにと言ひ付けておいて、自分は奥の方へ入つて行きました。惡魔は之を見ると、恐しく怒つて、

『こら百姓奴、何しに來たんだ。さあかうなりや、貴樣にもこツつくから、さうおもへ！』

と怒鳴りつけました。百姓は落付拂つて、

『いゝかげんにしろい。俺は貴樣を不憫だと思ふから來てやつたんだ。邪い女房がまた出て來たぞ。』

と云ひました。

『えつ、さうか？』

惡魔は大急ぎで窓にとび上つて、大きな目をしてぢツと耳をすまして聞いてゐると、往來で、

『邪い女房が來た、邪い女房が來た。』

と叫んで居るではありませんか。　さあ驚いたのは悪魔、

『大變だ、おい百姓！　俺は何處へ匿れたらいゝんだらうな？』

『また穴の中へかへるさ、女房はもう穴の中へは入らないから。』

と言はれて、悪魔は大急ぎで逃出して、穴の中へと飛び込んで終ひました。　それから後は何の消息もありません。　金持の娘は直ぐに全快して、歌を唱つたり、飛んだり跳ねたりするやうな元氣になりました。娘のお父さんは大變に喜んで、自分の財産を半分ほどその百姓に與りました。　が、邪い女房は今も未だその穴の中に居ります。

黄金の手籠

ある所に二人の兄弟が暮してゐました。兄は金持で意地悪でした。が、弟は働き者でゐて貧乏でした。何をしても、貧乏な弟は失敗ばかり重ねてゐました。そこで弟も考へて、自分の運勢を捜しに行くことにしました。で、野となく山となく、だん〳〵歩いて行きますと、とある野原に彼の運勢が寝そべつて涼んで居ました。見るより早く彼は運勢を打つて〳〵打ちすゑて、

『やい、此の怠け奴！他の人達の運勢を見ろ、夜の目

籠手の金黄

も寝ずに、主人のために働いてゐるではないか。それを貴様は晝間ですら何もしやしない。貴様のお蔭で俺達一家の者は餓死だぞ。』と言つて聞かせました。

すると運勢はぺこ〳〵頭をさげて、

『まア〳〵、亂暴なことは止めて下さい。あなたに木の皮製の手籠を差上げます。それをあけさへすれば、飲み物、食べ物、何でも欲しいものが出ます。』と言つて、小さな籠を出しました。百姓はそれを家へ持ち歸りましたところ、成程欲しいと思ふものは何でもその中にはいつてゐるのでした。兄はこのこ

とを聞くと、早速やつて來て、その不思議な籠を弟から奪つてしまひました。

貧乏な弟はまた運勢の所へ出掛けて行つて、わが身の不幸を訴へました。すると運勢は今度は彼に黃金の手籠を吳れました。貧乏な弟はそれを貰つて歸路につきましたが、中が見たくてたまりません。

少し行くと、早速籠を開けてしまひました。すると中から二人の小人が混棒を持つて躍り出し、彼をぽか〳〵毆るのでした。そしてひどく毆りつけると、また黃金の籠に隱れてしまひました。

『これはいかん。こんなものを持つて歸つた日には、食ひ物を出して貰ふどころか、あべこべに體を損ねてしまふ。』

かう思つたので、貧乏な弟は黃金の籠を路傍に投げ棄てゝ、まつしぐらに逃げ出しました。そして一里ばかり駈けて來て、後を振り返つて見ますと、何うでせう。黃金の籠はちやんと自分の脊中におんぶしてゐるぢやありませんか。百姓は驚いて、それを振り棄てると、息をはづませながらまた逃げ出しました。もうよからうと思つて、振返つて見ますと、また黃金の籠が脊中におんぶしてゐます。でしかたがないので、到頭そのまゝ家へ持ち歸りました。

すると、兄は弟が黄金の手籠を持つてゐることを嗅ぎつけて、木の籠と取り替へに來ました。

『お前の木の皮の籠は返してやらう。その代り黄金の手籠を俺によこせ。』

かう言つて、黄金の籠を持つて行きました。兄はそれから後度々ひどい眼に逢ひましたが、最早どうしても黄金の籠と手を切ることが出來ませんでした。

不思議なお土産

ある繁華な町に、大層暮し向きのよい夫婦が居りました。夫は寶石商のことですから、毎年一回は外國貿易に出掛けるのでした。ある時のこと、この商人はまた外國へ行く事になりました。船の用意も濟み、旅の身仕度も整ひましたから、妻に向つて、

『今度は何をお土産に買つて來ようかな？』

と訊きました。

『さうですねえ、何にしたらいゝでせう、困つちまいますわ、家には何でもたつぷりあるんですもの。だ

からあなた私を喜ばせるお積りなら、一番不思議なものを買つて來て頂戴な。』

『よし〳〵、見附かつたら買つて來よう。』

と云ひ遺して、商人は遠い〳〵外國へ旅立ちました。漸くある大きな町に着いて、持つて來た品は殘らず賣り拂ひ、新しい品も十分買ひ込みましたから、――どれ女房の土産でも買つて來ようかと、賑やかな街を指して、てくく〳〵歩いて行きました。

すると、ばつたり何處かの爺さんに出會しましたから、

『爺さん〳〵、私は不思議なものを買いたいのです

が、何處か此の邊に賣つてる店はありませんか？』

と訊いて見ました。所が運の好い時は馬鹿に好いもので、その爺さんが、

『不思議なものですか、そんなら俺の家に一つありますからお讓りしませう。』

と言ふではありませんか。そこで商人は喜んでその爺さんの家へ一緒に行きました。爺さんは商人を家へ伴れ込むと、庭の方を指して、

『御覽なさい、あれ彼處に鶩鳥がゐるでせう？』

『えゝ居ります。』

『これからあの鶩鳥が何んな藝當をするか、よく見

てお出でなさい……、おい〳〵鶩鳥此處へ來い！』

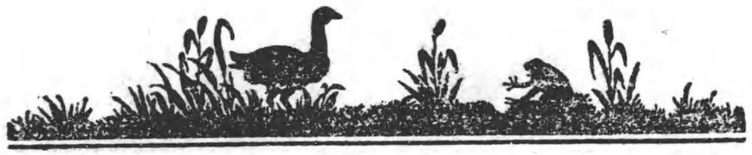
斯う言ひますと、本統にその鶩鳥が座敷へ這入つて來ました。すると爺さんは、肉鍋を手に取つて、恁う吩咐けました。

『これ鶩鳥や、この中へ這入つて寢るんだよ！』

鶩鳥が肉鍋の中へ寢ますと、爺さんはそれを火に掛けて燒き、やがてひき出して、それをお皿に盛りました。

『さア商人さん、食べて下さい。たゞ骨だけは食卓の下へ棄てないで、必ず一所へ溜めて置いて下さい。』

斯う言つて、二人は食卓に向つて、その鶩鳥をペロ



リ食べて了ひました。それから爺さんは食べ殘つた鳥の骨をテーブル掛に包んで、

『これ鶩鳥や、立つて羽皷きするんだ、そしたら庭へ行つて可い。』

と言ひながら、爺さんはポンとその骨を床に放り投げました。すると不思議ではありませんか、今が今迄食べ荒しの骨であつた鶩鳥が、すつかり元の立派な鳥になつて、はさ〳〵と羽皷きしながら庭へ駈け出しました。

『成程これは、不思議ですな。』

と言つて、商人はその鶩鳥を買ひ取り、船へ持ち込

んで、自分の國へ歸つて來ました。それから家へ着くと、土產の鷲鳥を細君に渡して、

『此の鳥は燒いても〳〵生き返るから、毎日たゞでビフテキが食べられるよ。』

と敎へました。

その晩はそのまゝ寢んで、翌くる日のことでございます。商人が支店の方へ出掛ると、直ぐ遊びに來たのが、商人の細君と大層仲好くしてゐる男でした。そこで細君はお親友を喜ばせようと思つて、不思議な御馳走にとりかゝりました。

『おい〳〵鷲鳥や、此處へお出で！』

と、窓から呼ぶと、鷲鳥はいつもの通り、ハコ〳〵座敷へ上つて來ました。

『これ鷲鳥や、此の肉鍋に這入るんだよ。』

けれども鷲鳥は横を向いたまゝ、肉鍋に這入らうともしません。

『さア此の肉鍋に這入るんだよ！』

『さア此の肉鍋に這入るんだツてば！』

いくら言つても知らばつくれてゐますから、商人の妻はぢれツたくなつて、遂々肉鍋を掛けたり外したりする鐵挺で、鷲鳥の脊中をぽんと叩きました。

するとそれからが本當に不思議なんです。鐵挺の

先端が鵞鳥にくツつき、持てゐた柄の方は商人の妻の手にくツついて、何うしてもかうしても離れないのです。困つたことになりましたから、商人の妻はお親友を呼んで、

『濟みませんが、私を此の鐵挺から引き離して下さい。』

と頼みました。そこで男が商人の妻を後ろから兩手で抱へますと、今度はその男もその儘くツついてしまひました……

處が物好きな鵞鳥ではありませんか、ぴッたりくツついてゐる二人を引張つて、庭へ出る、街へ出る、と

う〳〵夫のゐる支店の方まで曳いて行きました。之を見た番頭や小僧がゾロ〳〵駈け出して來て、引離さうとしますと、これもその儘くツついてしまひました。何しろ賑かな町のことですから、通りかゝつた人々は皆立止つて、この不思議を眺めるのでした。支店の奥にゐた商人も、何事だらうと駈け出して來ました。見ると、自分の女房のお尻を大勢の男が抱き附いてゐますから、――こいつは怪しからんと、その側へ寄つて來て、妻に向ひ、

『一體何うしたといふんだ？　殘らず白狀しろ！　白狀するのが厭なら、何時までもかうしてゐるがいゝ。』

ご叱りつけました。妻も據所なく逐一白狀してお詫びを乞ひました。そこで商人は鵞鳥を抱いて引離し、妻のお親友にはコツンと拳固を呉れ、妻を家の中へ伴れ込んで、

『分つたか、これが不思議ッて言ふものだ！』

と、言つてきかせました。

ダニーロと白鳥姫

一

むかし、キエフのウラヂーミル王の許には、扈從の者や農民が澤山居ました。不仕合せなダニーロも矢張り王樣についてゐる一人の貴族でありました。日曜日が來ると、ウラヂーミル王は凡ての者にきついお酒を一杯づゝ御馳走するのが例でありましたが、ダニーロはかつて一遍も頂いたことがありません。やがて復活祭になります。凡ての者は色んな賞與を貰ふのに、ダニーロばかりはやはり何も貰へ

ませんでした。

所が光明なる大祭の前夜になつて、ウラヂーミル王はダニーロを呼び、彼に千六百匹の貂を吳れて、明日のお祭迄に一枚の外套を仕立てて來いと仰せつけました。けれどその貂はまだ剝製してあるぢやなし、また釦も拵へてありません。縫飾さへ出來てゐないのです。所が釦には一々野獸の模樣を燒きつけ、縫飾には海の鳥を縫ひつけねばなりませんでした。

ダニーロは仕事が厭になつて、それをほうりだしたまゝ、門を出て、あてどもなく歩き出しました。そして泣きながら歩いて行くと、向ふから一人の老婆がやつて來まして、

『ダニーロさん、あんたは何をそんなに泣いてるのですか？』と訊きました。

『何をツて、婆さん、かういふ譯なんです。ウラヂーミル王樣が私に千六百匹のまだ剝製してない貂を下さつて、明朝までに外套を造つて來いといふのです。そして釦は一々新たに燒き、縫飾は一々絹糸で編み、釦には黃金の獅子を燒き込み、縫飾には海の鳥を編み込むんです、而もそれが聲を立てゝ啼かなければならないのです。私にそんなことが出來るも

のですか？　だからもういッそのこと、酒屋へ行つて火酒でもひつかけて來るんです！』といふと、その婆さんが、

『それならダニーロさん、酒屋などへ行かないで、青い海へお出でなさい。そして一本の樫の木の傍に立つておいでなさい。眞夜中になると、青い海が荒れて來て、あなたの所へ不思議な化物が出て來ますよ。それは手も足もない海月のお化ですが、眞つ白な髭を生やしてゐますから、あなたはその髭をひッ掴んで、矢鱈に毆りつけなさい。すると、その海月がダニーロさん何だつてそんなに私を毆るんです？

と言ひます。そしたらあなたは打つ手を休めて、かう言つておやりなさい、私の前へ白鳥姫を出して吳れろッて。すると白鳥姫が出て來ますよ。その美しい事と言つたら、羽が透いて體が見え、體が透いて骨が見え、骨が透き通つてその中の模樣が見えます。そればかりか、骨から骨へ神經が傳つてゐる樣が、まるで眞珠でも零れてるやうに見えますよ。』と教へて吳れました。

ダニーロは早速海邊に行つて、一本の樫の木の傍に立つてゐました。眞夜中になると、海が荒れだして、彼の前へ不思議な化物がにゅッと現はれました。

見れば手もなく足もなく、たゞ眞つ白な鬚ばかりついてゐる海月のお化でした。ダニーロは早速その白い鬚に取付いて、彼を地面へ叩きつけました。すると、その不思議な化物が口をきゝだして、

『ダニーロさん、何だつてあなたはそんなに私を毆りつけるのです？』

『白鳥姫が欲しいからだ。羽が透いて體が見え、體が透いて骨が見え、骨が透き通つて中の樣子が見えるやうな白鳥の美しいお姫樣が欲しいからだ。さア早くこゝへ出せ！』

二

少し經つと、白鳥姫が浮び出て、だんだん岸邊に泳ぎ寄り、ダニーロに向つてかう言ひました。

『ダニーロさん、あなたは仕事がないのですか、それとも何かする氣なんですか？』

『これは〳〵白鳥姫、仕事が無いどころか、何かするどころか、ウラヂーミル王樣から大變なことを持ちかけられたんです。それは一枚の外套を縫ふのです。けれど貂の毛皮も剝いでないし、釦も作つてないし、縫飾も出來てゐないのです。』

『まアさうですか。ではあなた、私をお嫁に貰つて下さいよ、さうすれば、すつかり私がしてあげますから。』

言はれて、ダニーロはぢつと考へ込みました。

『何うしたのダニーロさん、何を考へてゐるの？』

『ではよんどころない、お嫁に貰つて上げませう。』

といふと、白鳥は翼を擴げ、頭を振つて、忽ちのうちに十二人の若者を呼び出しました。それは大工や木挽や石屋などでした。彼等は早速仕事に取かゝつて、一つの立派な御殿を作りあげました。ダニーロは彼女の右手をとり、その甘い唇に接吻して、御殿の中へ伴れ込みました。それから二人は食卓に向つて、飲んだり食つたり涼んだりして、お互に結婚を祝ひました。

『さあダニーロさん、あなたはもうおやすみなさい。何にも心配することはありません。私が一切整へて置きますから。』と云つて、白鳥姫はダニーロを寢かして置き、自分は水晶宮の玄關に出て、翼を扇ぎ、頭を動かして、

『お父様々々々々、また私に技手を貸して下さい！』と言ひました。と、忽ち十二人の若者が現はれて、

『白鳥姫様何ぞ御用ですか？』と訊きました。

『えゝ、今直ぐに一枚の外套を縫つて貰いたいの。だけどまだ毛皮も出來てゐないし、釦も鑄てないし、縫飾も編んでないのだよ。』

技手は仕事に取りかゝりました。貂の皮を剝いで、外套を縫ふ者もあれば、金を鍛へて、釦を鑄る者もあり、さうかと思ふと縫飾を編む者もあつて、瞬く間に立派な外套が出來上りました。で、白鳥姫はダニーロの側へ行つて、搖り起しました。

『ダニーロさん、ダニーロさん、外套が出來ましたよ。キエフの町ではもうお祭の鐘が鳴り出しました。早く起きて出掛けないと遲くなりますよ。』

ダニーロは起て、外套を着て、出て行きました。すると白鳥姫は窓の所から顔を出して夫を呼び止め、銀の杖を出して言ひました。

『あなた、祈禱が終へて會堂を出たら、これで胸の邊を叩いて御覽なさい。すると、快い鳥の啼く音が出ます。怖ろしい野獸の吼える聲も出ます。その時あなたは此の外套を脱いで、ウラヂーミル王樣に着せておやりなさい。王樣は大層悦んで、あなたをお客に呼ぶでせう、そしてお酒の杯を出すでせうが、あなた底まで飲んではいけませんよ、底まで飲むと碌なことはありませんから。また私のことを人に話

しては駄目ですよ。私とあなたと二人して、一夜の中に御殿を拵へたことも、話しては駄目ですよ。』

ダニーロは銀の杖を手に取て出かけました。すると、また彼女は夫を呼び戻して、三個の卵を出しました。二つは銀の卵で、一つは黄金の卵でした。

『銀の卵の方は王様と王妃へお目出度うの印にお上げなさい。けれど黄金の卵はあなたが生涯一緒に暮す人へお上げなさい。』と言ひました。

三

ダニーロは白鳥姫と別れて、祈禱に行きました。

すると凡ての人々は驚いて、

『やー、ダニーロさん、よくその外套がお祭に間に合ひましたね！』といふのでした。

祈禱の後、彼は王様王妃の側へ行つて、お祭の御挨拶をしました。そして卵を出さうとすると、間違つて金の卵を摑み出しました。あはてゝそれを仕舞つて、銀の卵を出しましたが、側にゐたアリョーシヤ・ポポーウイチがちやんとそれを見てしまひました。

その場は何事もなく別れ〳〵になつて、ダニーロは會堂から外へ出ました。そして銀の杖を取り出して、自分の胸をぽん〳〵と叩きました。すると、鳥

が啼き出すやら、獅子が吼え出すやら、怖ろしい騒ぎなので、大勢の人々は皆驚いて、ダニーロを見てゐました。所がアリョーシヤ・ポポーウイチは不具者の乞食に變裝して來て、お祭の施物を皆に乞ふのでした。皆は何か呉れて遣るのに、只一人、ダニーロだけは、ぽかんと突立つて考へてゐました――俺は何を呉れてやらう、何もありやしない！　といつて、此の大祭に何も遣らぬ譯には行かぬ、はて困つたものだと思つたが仕方がない。とう〳〵思ひ切つて、黄金の卵を呉れて遣りました。

アリョーシヤ・ポポーウイチは黄金の卵を受け取

ると、また元の自分の着物に着かへました。

その中に皆の者はウラヂーミル王の饗宴に呼ばれ、飲んだり食つたりした揚句、銘々の自慢話しに移りました。ダニーロもへべれけに酔拂つてしまつて、遂々妻のことを自慢して話しました。するとアリョーシヤ・ポポーウイチが、そのダニーロの妻をよく知つてゐるといつて、威張り出しました。ダニーロは口惜しがつて、

『アリョーシヤさん、本當にお前さんが私の妻を知つてるなら、私の首を上げますよ、だが知つてゐなかつたら、お前さんの首を頂戴しませう。』と言ひまし

た。

アリヨーシヤは爪先の向いた方へ、的もなく歩いて行きました。そして歩いたり泣いたり、泣いたり歩いたりしてゐました。ど、向ふの方から一人の老婆が遣つて來て、訊ねました。

『アリヨーシヤさん、あんたは何をそんなに泣いてゐるのです？』

『うるさいよ、婆さん、お前なんかの知つたこッぢやないや。』

『でも、ひよつとしたらお役に立つかもしれませんよ！』

言はれて、アリヨーシヤはそのことを話しました。

『私は今ダニーロの妻を知つてゐるッて、自慢したんだけれど、實は知らないで困つてゐるんだよ、何處に居るんだらうね婆さん、ダニーロの妻は？』

『それやア旦那さん、あんたなんかに解りッこありませんよ。小鳥でさへ彼處へは飛んで行けないんですから、――でも私が教へて上げる道を行つたら大丈夫解ります。宜いですか、かう行つて、かう行つて、またかう行くと、立派な御殿がありますから、その側へ近寄つて、白鳥姫を王樣の宴會へお招きなさい。さうすると、彼女は顏を洗つたり、身仕度を整へたり

するので、ちよつと窓の上に指環を載せますから、あなたはその指環を取つて來て、ダニーロさんに見せておやんなさい。』

アリヨーシヤは教へられた通りの道を行き、やがて石造の窓に近づいて、白鳥姫を王樣の宴會へ招きました。彼女は顏を洗つたり、お化粧したり、宴會へ行く身裝を整へ始めました。その隙を見て、アリヨーシヤは彼女の指環を盜み、王樣の御殿へ持つて來て、それをダニーロに見せました。

すると、ダニーロは起ち上つて、王樣に言ひました。

『ウラヂーミル王樣、私は今から首を遣らねばなりませんから、家へ歸つて、妻と別れの挨拶をして來ます。』

やがてダニーロは家へ着きました。

『さアさア、白鳥姫、私はとんでもないことをしてしまつた。醉に紛れてお前さんのことを自慢したものだから、自分の首を奪られることになつた！』

『知つてますよ、知つてますよ。みんな知つてゐます。ですからダニーロさん、これから行つて、王樣王妃を初め、町の人達を殘らず家へお客に呼んでいらつしやい。若し王樣が、道が惡くて、河が荒れて行かれないと仰有つたら、あなたかう申上げなさい、――王樣

御心配には及びません、道には紅い羅紗を敷きつめ、河には橋が懸けてありますから、塵一つ靴につくやうなことはありませ、泥一つ馬の蹄を汚すやうなことはありませんッて。』

ダニーロはお客を呼びに出掛けました。白鳥姫は玄關に出て、翼を擴げ、頭を動かして、自分の家からウラヂーミル王様の御殿まで美しい橋を造りました。そして人馬の通る所には紅い羅紗を敷き、錫を被せた釘でしつかり打ち止めました。なほ道の片側には草花や木を植ゑて、鳥を啼かせ、他の片側には林檎や色々の果物を熟させて置きました。

四

王様はお客に行く仕度をして、王妃を伴ひ、勇敢な軍隊を皆ひきつれて、出發しました。最初の河へ近づいて見ると、橋の下を甘味さうな麥酒が流れてゐました。數多の兵士がそれに醉つて打倒れました。次の河へ來て見ると、今度は上等な蜜が流れてゐました。そこでまた軍隊の半數以上それに醉ひつぶれました。第三番目の河へ來て見ると、今度は立派な葡萄酒が流れてゐました。將校達は爭つてそこへ飛んで行き、ぐいぐいに醉拂つてしまひました。

それから第四番目の河へ來ました。すると其處にはきつい火酒が流れてゐました。王樣が後を振返つて見ると、將官連は皆横になつて斃れてゐました。今滿足に殘つてゐる者は、王樣を加へて四人しか居ません。それは王樣とお妃とアリヨーシヤと、不幸者のダニーロとでした。

招待されたお客は軈てお着きになり、高い建物の中へ案内されました。見ると楓の卓がずゝツと並んでゐて、その上に絹布の卓掛がかけてあります。椅子はと言へば、五色の色に美しく塗られてゐます。お客は其處へ坐らせられました。色々な料理が出ます、舶來のお酒が出ます、次から次へと大變な御馳走ですけれど、王樣王妃は少しも召上りません、一口も召上りません。たゞもう何時白鳥姫が現はれるかと思つて、その方ばかり覗めてゐました。暫らく座に着いて、彼女を待つてゐました。そしてとう〳〵御歸りの時刻になつてしまひました。

そこでダニーロは彼女を呼びました。一遍、二遍また三遍――三度呼んでもまだ出て來ませんでした。するとアリヨーシヤ・ポポーウイチが言ひました。

『若しも私の妻がこんなことをするならば、私はみゝちり仕置をして遣る――』

その言葉を聽くと、白鳥姫はそゝと玄關へ出て來ました。

『あべこべに男の人達を懲らしめてやる。』

と言ひながら、翼を飜へして頭を動かしました。そして何處ともなく飛び去つてしまひました。すると、あとにはお客の人々が沼の中の小さい丘の上に殘されてゐました。彼等が辛うじて御殿へついた時には、頭の先から足の爪先まで、すつかり泥だらけになつてゐました。

ろしあお伽噺　マルコとワシカ
定價金一圓四拾錢

大正十四年八月廿九日印刷
大正十四年九月三日發行

譯者　昇曙夢
發行者　大倉保五郎
印刷者　村田豊吉
東京市京橋區新榮町五丁目七番地
印刷所　株式會社大倉印刷所

發行所　東京市日本橋區通一丁目拾九地
大倉書店
電話浪花四、二四〇・二、三九〇
振替東京二三八

不許復製

544
57

終